

セカイ系入門

渡邊大輔

新 「セカイ系」論!

ゼロ年代の想像力と批評を
次世代へと接続するための、

『新世紀エヴァンゲリオン』、高橋しん『最終兵器彼女』、秋山瑞人『イリヤの空、UFOの夏』、新海誠『ほしのこえ』etc.……東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生』、宇野常寛『ゼロ年代の想像力』、限界小説研究会『社会は存在しない セカイ系文化論』、前島賢『セカイ系とは何か』etc.……

セカイ系入門

渡邊大輔

星海社

351



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに——「セカイ系」を／で辿り直す

セカイ系、ふたたび

現在、「セカイ系」という言葉を知っているひとが、果たしてどれくらいいるでしょうか。

この言葉の響きに、どこか心の片隅がムズムズする気恥きはずかしさやノスタルジーを覚えるならば、おそらくは私と同じく、一〇代や二〇代でアニメやライトノベル、美少女ゲーム、ニコニコ動画などに親しみ、この言葉と出会った同世代のひとでしょう。また、大学生などのいまの若い世代でも、やはり自分の好きなアニメやライトノベル、ゲームなどの情報をネットで追いかけているうちに、この言葉を偶然知ったというひともあるかもしれません。あるいは、そうしたサブカルチャーにはあまり馴染なじみがなく、むしろ現代の人文書や文化批評の書物を読んでいたら、その記述のなかに出てきたというひとにもいるに違いありません。

このセカイ系という言葉は、マンガ、アニメ、ライトノベルなどの現代日本のサブカル

チャー（オタク文化）の一部に見られる、特定の物語類型を指す言葉です。二〇〇〇年代（ゼロ年代）の初頭にウェブ上で誕生して以来、すでに四半世紀近い歴史を持ちます。オタク系のポップカルチャー界隈^{かいわい}では、ほかに「空気系」（または「日常系」）や「なろう系」などの、特有の物語類型を意味する、似たようなジャーゴンがすでにいくつか知られています。ですが、それらのうちのひとつです。

本書『セカイ系入門』は、この「セカイ系」という言葉の二〇年以上におよぶ歴史的な変遷^{へんせん}を初学者向けに整理するとともに、もう少し広く文化史的な意義を考察し直し、それらの作業により、二〇二〇年代の現代日本文化の状況においてこの言葉が持つ意味を考えることを目的としています。

セカイ系の再起動

ただ、セカイ系については、この二〇年あまりの間にも関連する重要な書物がすでに複数冊刊行されています。だとすれば、いま、あらためてこの言葉をテーマに——しかも、「入門書」を冠^{かん}した本を書くことには、どのような意味があるのでしょうか。

セカイ系に関するもつとも基礎的な文献のひとつであり、本書でもこの後、繰り返し参

照することになる『セカイ系とは何か』の冒頭で、著者の前島賢まえじまさとしさんはセカイ系を「亡霊」に喩たとえています。この「亡霊」を意味するフランス語の revenant は、revenir（再来する）という動詞に由来していますが、実際に、セカイ系という言葉は、この四半世紀近く、急速に消費されたあとに忘却されては、またふとした機会に甦よみがえるということを何度か繰り返してきました。

第一章以降で詳しく見ていきますが、この言葉は、まず二〇〇〇年代（ゼロ年代）を通じて流行し、幅広い注目を集めたあと、一時期、あまり顧みられなくなりました。それには、ゼロ年代の後半から終わりにかけて、右の前島さんの著作をはじめとするセカイ系をテーマとした注目を集める評論書の刊行が相次ぎ、セカイ系をめぐる問題が、一応のところで総括そうかつされたと多くの人々がみなしたことも大きかったでしょう。

実際、この期間にも、セカイ系は何度も何度も、「古くなった想像力」だと盛んに強調されてきました。たとえば、セカイ系の代表的論客として知られた批評家の東浩紀あずまのりきさんは、二〇〇七年前半の時点の著作で、「本書執筆の時点では「註…セカイ系は」早くも言葉として古くなり始めている」（『ゲーム的リアリズムの誕生』）と注記しており、その六年後の二〇一三年後半の著作でも、ふたたび「この言葉「註…セカイ系」は、最近はほとんど聞かなくなりました」

『セカイからもっと近くに』と回顧しています。ちなみに、当時の東さんがこのように記す文脈には、まさにその東浩紀Ⅱセカイ系批判の文脈で論壇ろんだんに登場し、「セカイ系」とは明らかに「…」既に追い越された古い想像力にすぎなかった」と喝破かつぱした評論家・宇野常寛うのつねひろさんの二〇〇八年のデビュー著作『ゼロ年代の想像力』の存在も関わっていると言えます。

ただ、言葉が世に登場してからわずか数年での度重なる「オワコン」宣言にもかかわらず、というよりもだからこそ、セカイ系は、——一五年前の著作で前島さんが葬り去ろうと、試みたにもかかわらず——約二〇年後の現在にいたるまで連綿と参照され続けています。この現状には、おそらくは令和世代の若い読者こそ戸惑とまどうでしょう。

前島さんが『セカイ系とは何か』を刊行した数年後の、だいたい二〇一〇年代の半ばを過ぎるあたりから、セカイ系という言葉は、ふたたび人々の注目を集めるようになりました。その大きなきっかけとなったのが、セカイ系作品の代表的な作り手のひとりと目されていたアニメーション監督かんとくの新海誠しんかいまことさんの存在です。

新海監督は、二〇一六年八月、長編アニメーション映画『君の名は。』を発表しました。よくご存じの通り、この作品は、現在でも国内で歴代第五位（邦画では第三位）となる映画興行収入二五〇億円超の歴史的な大ヒットを記録し、この年を代表する社会現象となりま

した。この大ヒットを受けて、当時、『君の名は。』をめぐる批評やレビューが膨大に書かれましたが、本作の物語が——新海アニメとしてもひさびさに——かなりセカイ系的な枠組みを持つていたため、このキーワードと絡めた文章が無数に書かれることになったのです。また、それを受けて、監督の新海さん自身も、当時のインタビューなどで、自作とセカイ系との関係について触れる機会が見られたこともあり、この言葉があらためて盛んに取り上げられるようになったわけです。つまり、近年のセカイ系リバイバルのきっかけを作ったのもまた、新海誠監督でした。

そのことはたとえば、Googleで検索された単語のトレンド（検索数）の推移をグラフで確認できる「Google Trends」でもある程度は確かめられます【図1】。試しに「セカイ系」を入れて調べると、（検索）ことに結果が微妙に変動することがあるものの、二〇〇四年一〇月に最初のピークを迎え、それ以来、二〇〇七年八月頃まで数年にわたって高い注目（検索数）を集めたあと、二〇一〇年五月を最後にして最大のピークに、グラフが緩やかに下がりはじめます（Google Trendsの仕様では、二〇二五年現在では二〇〇四年以降しか遡れません）。ここで「セカイ系」の検索数が最初に跳ね上がっている二〇〇四年一〇月が、新海誠監督のアニメーション映画『雲のむこう、約束の場所』（二〇〇四年）劇場公開の前月だというのが

ポイントです。そしてその後、検索数が一時的に上昇するのが、二〇一六年九月、二〇一九年七月、二〇二一年一月の三回。このうち、二〇一六年九月は『君の名は。』の公開直後、二〇一九年七月は『天気の子』の公開月です。補足すると、じつは二〇一一年五月にも検索数の一時的な上昇が見られるのですが、これはこの前月に完結し、セカイ系との関連で語られることも多いテレビアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』が関係しているのかもしれませんが。加えて現在のところ最後に検索数が上昇した二〇二一年一月は、直接的な関連は不明ですが、これもセカイ系の原点と言われる大ヒットアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』シリーズの完結編、『シン・エヴァンゲリオン劇場版』(二〇二二年)が、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに伴い、二度目の公開延期となった月です。また、この間の二〇一七年には人気声優を起用したバラエティ『セカイ系バラエティ僕声』^{ぼくこえ}なる番組も作られました。

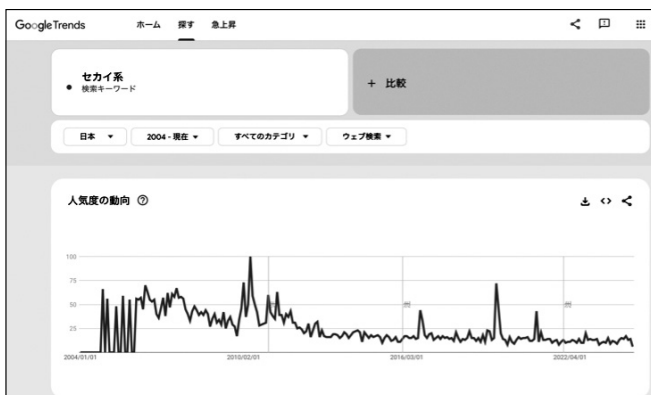


図1「セカイ系」の検索数の推移

こうしてセカイ系は、二〇一〇年代以降もある程度は現代カルチャーを象徴するキーワードとして^{すた}廃れることなく使われ続け、ある側面では歴史化した用語として、現在まで生き残っています。

いまのウェブ上でも、ウィキペディアでは中国語版と韓国語版でも項目が作られており、artscape、美術手帖、ピクシブ百科事典、コトバンクなどの各種サイトにもセカイ系の解説項目ができています。また、セカイ系とも関係の深い文芸誌『ファウスト』や新海作品がゼロ年代半ば以降に紹介されていた中国でもセカイ系に注目する研究者が現れたりしています（「不可能性としてのセカイ系」）。

二〇二四年も、「セカイ系」をテーマとした同人誌『ferne』が二〇二一年に話題を呼んだライター^{きたでしおり}の北出葉さんのデビュー著作『世界の終わり』を紡ぐあなたへ デジタルテクノロジーと「切なさ」の編集術』や、SF・文芸評論家の藤田直哉^{ふじた なおや}さんが監修を務めた『別冊 ele-king 日本の大衆文化はなぜ「終末」を描くのか——漫画、アニメ、音楽に観る「世界の終わり」』（Pヴァイン）などの「セカイ系」を主題とした評論書やムックが相次いで出たり、名古屋の男性アイドルグループ「カラフルダイヤモンド」の楽曲「セカイ系LOVE」^{しんとう}（二〇二四年）がリリースされたりと、さまざまな場所でいまなおこの言葉は言及され、浸透

しています。

セカイ系論の再起動

しかし、セカイ系の歴史や周辺の文化事象を紹介したり考察したりする、まとまった概説書や入門書の類は、前島さんの著作が出てから、じつはここ一五年間、ほぼまったく出ていません。

たとえば、セカイ系関連の批評界限でひさびさに話題になった北出さんの著作にせよ、いわゆる「セカイ系の解説書や入門書」としては書かれていません（その点では、同書に先行して北出さんが刊行した同人誌『Tene』の方がずっと参考になります）。というのも、同書では、もちろん、過去のセカイ系作品群や主要作家への重要な言及もありますが、その内容は主に、二〇二〇年代に人気を集めるスマートフォンゲームやミュージックビデオ、ボーカロイド文化、現代アートなど、著者が考える「セカイ系的」なカルチャーの理論的・批評的な分析にあてられています。そして、それらの現代のコンテンツとかつてのセカイ系作品やその歴史との関連の論述は、私の見るところ、本のなかでは必ずしも明示的ではありません（元来、私が歴史研究を専門としてきたので、よけいそう感じるところもあると思いま

すが)。それもそのはずで、北出さん自身がnoteで自作解題しているように、彼の著作の目的は、あくまでも「スマートフォン／ソーシャルメディアが普及したデジタル時代における感性論」の分析にあり、「ヘセカイ系」と呼ばれる作品」や想像力は、そのための補助線として参照されているからです（夢を叶えた年——2024年私的振り返り）。

もちろん、「歴史histoire」が同時に「物語histoire」を意味するように、あらゆる歴史記述はつねにある特定の視点から書かれざるを得ず、普遍的・客観的な歴史記述なるものは存在しません。ただ、とりわけこれからセカイ系に触れる若い読者のために、その始まりから現在までの流れを押さえた、セカイ系の入門書があらためて書かれてもいいのではないか。

そのような初発の動機を持つ本書は、セカイ系について総合的に論じられてこなかったこの十数年のブランクを含め、この四半世紀近くのセカイ系の歩みと今後の展望を初めて俯瞰的にまとめた評論書です。加えて、その新たな総括から、セカイ系をめぐる批評地図の更新も目指したいと考えています。

セカイ系論の再設定と交通整理

そして、私がいまあらためてセカイ系に関する本を出すのには、じつはもうひとつの理由があります。それは、いま記したように、セカイ系についてこの一〇年ほど、まとまった著作が書かれなかったことにも関係しています。

というのも、確かにセカイ系は、いまや現代日本の文化を語る時に欠かせない批評用語として根づいています。しかし、ここ数年、世の中で使われるこの言葉の状況について、私自身が少なからず違和感を持ち、また先にも少し触れたように、私よりも下の世代のセカイ系理解への影響が^き気掛かりになってきたためです。

もちろん、この言葉に限らずとも、スラングから派生したあらゆる言葉がそうであるように、ゼロ年代の批評界限で用いられていた当時のセカイ系にも、必ずしも厳密な定義があったというわけではありません。また、言葉の意味や定義が、時代とともに変化していくこともごく自然なことでしょう。ただ、そうは言っても、近年のセカイ系という言葉の使用われ方や理解には、かなり逸脱^{いつだつ}したものが見受けられるようになってきたことも確かです。それはまず、私のごく個人的な実感に基づいています。

私は、現在勤める大学のゼミで学生を指導するようになってから一〇年が経ちます。私

のゼミでは、アニメーションを中心に、ポピュラーカルチャーにまつわる映像文化全般を専攻しているのですが、だいたい数年くらい前からでしょうか、ほんの数名ではあれ、セカイ系という言葉を知っており、関心を持つ学生がチラホラ見られるようになってきました。そのなかには、卒業論文のテーマにまで選んだ学生もいます。ただ、そうした学生たちは、セカイ系について、ネット上のまとめブログやSNSに書かれてある内容だけを讀んで理解している場合が少なくないのです。たとえば、ある時にはゼミのレポートのなかでこんな風を書いていた学生がいました。

「セカイ系の代表作は『涼宮ハルヒの憂鬱』すずみや ゆううつ」

これから解説していきますが、ゼロ年代を代表するライトノベル『涼宮ハルヒの憂鬱』(二〇〇三年)が文化批評のなかでセカイ系の文脈でしばしば語られてきたことは確かであり、その点でこの学生の記述は、それ自体では間違いではありません。ただ、この学生はやはり最近のネット情報で単にこういった解説を読んだだけであり、いわゆるセカイ系という言葉のブームのそもそもの発端となった高橋しんや秋山瑞人たかはし あきやまみずひとといった作家の名前は知りま

せんでした。『ハルヒ』をセカイ系の文脈で語る解釈は、ゼロ年代にすでに東浩紀さんらも行っており、前島さんが『セカイ系とは何か』で「ポスト・エヴァのオタク文化を象徴する作品」として挙げています。ただ、『ハルヒ』＝セカイ系の「代表作」という理解は、やはりゼロ年代のセカイ系をめぐる、それなりに複雑な経緯や定義を知っている人間からすると、かなり違和感があるものであり、いくつかの文脈の説明を必要とするものです。ましてや高橋しんや秋山瑞人の作品を知らなければ、それは偏重した知識というものでしょう。

一応、補足しておけば、もちろん、後続世代というのはえてしてそういうものであり、この学生の理解が足りないと言っているわけではまったくありません。ですが、私の見ている限り、いまの若い世代の「セカイ系」についてのイメージというのは、それについてすでに論じられたさまざまな込み入った議論の経緯をすっ飛ばした形でネット上に散らばっている、匿名の文章をそのまま鵜呑みにした理解である場合が少なくないのです。

また、そうした傾向は、ネット上の文章だけでなく、近年に刊行された書籍のなかの記述からも垣間見ることができます。たとえば、二〇二三年に刊行された氷川竜介さんの『日本アニメの革新歴史の転換点となった変化の構造分析』には、こんな記述があります。

「どんな願いでも叶え^{かな}られるアイテム」などの特殊な設定を使って「世界の変革」ないし「願望の成就」を描いた作品は、20世紀末から21世紀初頭にかけて急増していきました。

ところが現実世界では願望成就のためには「社会」があり、それを会社や部署など何階層かに分割した領域で、個人の努力と協調が求められます。とは言え、その努力は報われない傾向にありますから、「世界」のほうを書き換えて幸せになりたいというわけです。その努力の意識が欠落し、「世界」に直結させるのは「チート（不正）」願望だという点で批判もされ、カタカナで「セカイ系」と呼ばれるようになりました。この進化形が「異世界転生もの」です。

セカイ系が異世界転生もののルーツだという評価はひとまず置いておくとしても、右のセカイ系の説明は、本来の定義や言葉の成り立ちの経緯からもさすがにかけ離れ過ぎているだろうと思います。著者のアニメ・特撮研究家の氷川さんは、このセカイ系の定義に基づいて、新海誠監督の『君の名は。』を論じ、この作品が「現実に起きた東日本大震災を連想させるのに、そこに非現実的で安易な答えを出しているのではないか」という意味で、「セ

カイ系」のチートの延長ととらえられたのです。しかし「∴」「セカイ系」と方向性が違うのは確実です」と結論づけるのですが、そもその前提が大きくズレているために、論理の筋道も納得し難いものになっていると言わざるを得ません。

また、セカイ系そのものに関する定義ではありませんが、哲学者の山内志朗^{やまうちしろう}さんも、最近、こんな説明をしていました。「セカイ系の受け皿はZ世代、ゼロ年代と言われます。ゼロ年代とは、二〇世紀の後半、一九八〇年以降に生まれた方を言うようですよ」（「天使とアニメー」）。これも山内さんの誤解で、「セカイ系の受け皿」は、一九九〇年代後半以降に生まれたZ世代ではなく、いわゆる「ロスジェネ世代」（氷河期世代）ですし、「ゼロ年代」とは世代の名前ではなく、年代の名前です（また、Z世代のZは「Zero」の意味ではありません）。ちなみに一応補足しておくと、山内さんはグノーシス主義や聖霊主義^{せいれいしぎ}などの中世哲学をセカイ系の文脈で読み解くユニークな試みをされており、セカイ系の理解は細やかです。

また、二〇二二年に大きな話題となったライター^{いなたとよし}の稲田豊史さんの『映画を早送りで観る人たち ファスト映画・ネタバレ——コンテンツ消費の現在形』のなかには、いまの若者（Z世代）が、SNSで自分の価値観を批判されることに耐性がなくなっているという話題に関して、こんな説明があります。「ネット上の個人の発言を社会と錯覚してしまう。元の

意味から異なることを承知で言うなら、まるで「セカイ系」だ。「∴」／やや強引にこの構図を当てはめるなら、繊細な彼らはネットを通じて、自分の「お気持ち」（近景）が、大文字の「社会」や「マスコミ」（遠景）と、直結してしまっている」（以下、引用中のスラッシュは原文の改行箇所を表します）。稲田さんは、ここではセカイ系の「元の意味から異なる」とさすがに慎重に注記しています。しかし、この記述に対しては、北出さんがnoteで違和感を表明しており、また「セカイ系」という用語の考案者と言われるぶるにえさんもツイッター（現在のX）で反応しました。

ともあれ、セカイ系ブームから二〇年以上、それを総括した『セカイ系とは何か』の刊行から一〇年以上が経ったいま、当時を知らない先ほどの大学生のような世代が、元の意味を参照しないまま、このような派生的な解釈のみを読んで、誤解したまま使っているという場合が少なくないように思えるのです。

誤解のないように断っておけば、ここで挙げた文献はいずれも、示唆に富む内容に満ちた、大変刺激的な仕事です。私も自分の学生に薦めたりしています。しかし、だからこそ、こうした良書やベストセラーでも本来のセカイ系という言葉の意味から離れてしまった使い方が紛れ込んでいることによって、いまの若い世代がセカイ系について誤った理解をし

てしまう——そして、実際にそうした場面に出会している——ことを懸念^{けねん}しているのです。

したがって、もともとのセカイ系ブームの成り立ちと推移を実際に見てきた私よりも年長世代、あるいは私と同世代の読者にとっては、ここ一〇年ほどの過去と現在のセカイ系がどうなっていたのか、そして、どうなっているのかを、ぜひ本書で確認していただきたいと思います。さらに本書は、いま述べた通り、そうした経緯を知らない、さらにはセカイ系ブーム以後に生まれた若い世代の読者に向けても書かれています。

セカイ系を忘却した年長世代と、セカイ系を誤解しつつある年少世代の溝^{みぞ}を埋^うめ、ここ三〇年ほどの現代日本のサブカルチャーの一角で発展したユニークな物語的想像力の歴史の「交通整理」をすること。それが、本書の果たそうと試みる役割です。

可能な限り、分野を横断した検証を心がけ、複数の視点を考慮し、客観的な記述を行ったつもりですが、もちろん、私という個人から見た歴史であるため、フォロワーしきれなかった論点や踏み込んだ解釈をはじめ本書の記述のなかにも至らない点は多々あるでしょう。ただ、セカイ系世代の人間が、言葉の誕生からもうすぐ四半世紀を迎えるいまこそ、あらためてセカイ系について体系的にまとめておく作業は必要なのではないかと感じた次第です。読者のみなさんが本書からセカイ系についての思考や思いをそれぞれにめぐらせ、忌^き

憚^{たん}なきご意見を本書にいただき、そこからまたセカイ系についての議論が未来に向けて活性化していけば、著者としてこれ以上の喜びはありません。

著者について

本書の著者である私とセカイ系との関わりについても簡単に説明しておきたいと思います。現在、私は大学に勤める傍^{かたわ}ら、主に映画批評やアニメ批評を専門とする批評家や研究者として活動しています。『セカイ系とは何か』の前島さんと同じく一九八二年生まれ。テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（一九九五～九六年）の最終回が放送された時、主人公・碇^{いかり}シンジと同年の一四歳でした。オタクの世代区分で言えば、ロスジェネ世代（氷河期世代）とほぼ重なる第三世代に属しています。

そんな私が書いた初めての評論が、何を隠そう「セカイ系」をテーマとするものでした。大学卒業後の二〇〇五年一月、私は先ほども名前を挙げた東浩紀さんが自主制作で発行していたメールマガジン『波状言論』に、年明けに半ば衝動的に書き上げてしまった二万字超のセカイ系論を投稿し、同月末にそれが掲載されたことで批評家としてデビューしました。まだ二〇代前半だった私が書いたこの論考は、当時の私自身にその自覚はなかった

ですけれども、振り返ると、セカイ系をテーマにしたもとも早い時期の本格的な評論のひとつだったと言えます。しかも、その時に私との実質的なやり取りを担当してもらったのが、当時学生スタッフとして東さんの個人事務所に出入りしていた、前島賢さんだったのです。ちなみに、その私の拙い^{つたな}セカイ系論は、これも当時セカイ系について積極的に言及していた精神科医で批評家の斎藤環さん^{さいとうたまき}に雑誌『小説トリッパー』でやっていた連載（のちに『文学の断層 セカイ・震災・キャラクター』にまとめられます）のなかで取り上げていただきました。

その年の秋、前島さんに誘われて、私はのちに「限界小説研究会」（限界研）という名前の若い批評家サークルに発展することになる読書会に参加することになります。そこでは、やはり当時のセカイ系の主要な論者であったミステリ作家の笠井潔さん^{かさい きよし}とも知り合うことになりました。このように、セカイ系で物書きとしてデビューした当初の私の周囲には、偶然にも、いわばセカイ系論壇の主要な顔ぶれが軒並み揃^{のきな}っていたのです。

その後、二〇〇七年、宇野常寛というまだ一般には無名に近かった若手評論家が『SFマガジン』誌上に評論「ゼロ年代の想像力」の連載を開始します。翌年にそれが書籍にまとめられると、「ゼロ年代の批評」とも呼ばれたサブカルチャー評論界限でセカイ系をめ

ぐる議論が一気に拡大、加熱していきました。また、この頃には狭いサブカルチャー評論以外にも、現代思想、文学、社会学、政治学など、人文系の広い領域でセカイ系が注目され、語られるようになっていました。当時の私は、某文芸誌の新人賞の下読み（二次選考）のアルバイトをやっていたのですが、そこに送られてくる文芸評論でもセカイ系への言及が目立ち、こんなところまでセカイ系が進出するようになったのかと驚いたものです。

そして、この宇野さんの『ゼロ年代の想像力』の見取り図に対する批判的応答として、二〇〇九年、限界小説研究会が評論集『社会は存在しない セカイ系文化論』を刊行します。ウィキペディア日本語版の「セカイ系」の項目の外部リンクには、二〇二五年七月現在でも、この本の刊行記念トークイベントのネット記事のリンクが張られています。そして、（最近ではその慣習はなくなったようですが）当時の限界小説研究会は、評論集では実質的な編者の名前は表に出さず、あくまでも集合的な「研究会」の名義で本を出そうという合意があったので、この本でも編者、および序文の筆者は単に「限界小説研究会」名義となっています。しかし、これもここで明かしてしまうと、その後のセカイ系をめぐる文献でも必ずと言ってよいほど参照・引用されるこの本の実質的な編者と、序文の執筆者は私だったのです。ちなみに、研究会のメンバーだった前島さんはこの論集には参加せず、翌

二〇一〇年に、『社会は存在しない』とは対照的なアプローチから、セカイ系ムーブメントの総括的な書物として『セカイ系とは何か』を刊行するのです。

『社会は存在しない』刊行後の私は、徐々に仕事のメインを映画批評に移したこともあって、セカイ系を論じることとはなくなっていました。ところが、それから数年経ち、『君の名は。』が公開された時、その公開直後にカルチャー情報サイト「リアルサウンド映画部」に、ひさびさにセカイ系と美少女ゲームの文脈から本作を読み解くレビューを寄稿したのですが、これが大きな反響を呼んだのです（この原稿は、現在、拙著『明るい映画、暗い映画』に収録しています）。また、二〇一九年に公開されたアニメ映画『HELLO WORLD』の劇場パンフレットに、セカイ系との関係からまとめたレビューを執筆するなど、その後もこれまで断続的にセカイ系についての文章を書いてきました。

ざっと振り返ってみました。こんなふうに、私の活動は、やや手前味噌みそながらゼロ年代のセカイ系論壇にも一定の足跡を残してきたと自負しています。

各章の概要

それでは、以下の各章の概要を示しておきましょう。

二部構成からなる本書では、前半と後半でそれぞれ三つの章を置きました。前半の三章は、主にセカイ系という言葉が誕生したゼロ年代初頭から二〇二〇年代の現在までの約二〇年間の歴史を——場合に依じてそれ以前の経緯にも目配りしながら——総括しています。第一章は、前島さんの『セカイ系とは何か』を踏まえて、もう一度、「セカイ系」という言葉の定義について再考しています。

続く第二章と第三章は、『セカイ系とは何か』の刊行がちょうど二〇一〇年なので、その前後あたりで章を分けることにしました。つまり、第二章は、(一九九〇年代の状況も踏まえつつ)セカイ系が誕生した二〇〇二年から二〇一〇年くらいまでの、これまで主に整理されてきたセカイ系の作品や言説の歴史をたどります。そして第三章は、いわゆる「3・11」を起点とし、SNSの普及や『君の名は。』の大ヒットなど、新たな社会事象のなかで変化してきた、二〇一〇年代から現在までのセカイ系の流れを整理しています。この三つの章で、現在までのセカイ系の歴史の一貫したパースペクティヴを打ち出すこと、これが本書の前半の趣旨^{しゅし}です。

続く後半の第二部の議論は、かいつまんでいえば、その前半の見取り図を踏まえて、セカイ系をもう少し批評的に拡張して捉え直す作業に費やされています。第四章と第五章は、

『セカイ系とは何か』が整理したような、いわば狭義きようぎのセカイ系の歴史や言説、作品群を離れて、セカイ系的な想像力というか、「セカイ系的なもの」の歴史の再構築を、主に私の専門である文芸と映像の分野から試みています。そして最後の第六章では、今度是对照的に、二〇二〇年代Ⅱ令和の時代における「セカイ系的なもの」の可能性のゆくえについて、「推し」というキーワードを軸に検討してみます。

したがって、「セカイ系」という言葉にまつわる来歴や重要な問題系についてコンパクトに知りたいというかたは、第三章までの第一部だけお読みいただいても構いません。逆に、セカイ系についてすでによく知っているという読者は、第一部は読み飛ばし、第二部の議論に進んでいただいてもいいでしょう。

なお、読者の理解をより促すために、巻末にはセカイ系に関する主だった略年表を付しました。

今回、新書という形態を選んだこととも関係していますが、なるべく読むのに肩の凝らない、コンパクトで軽めの入門書を目指しました。すでにセカイ系を知る従来の読者にとどまらない、ぜひ広い読者の方々に手に取っていただければ著者としては嬉しく思います。

〈参考文献〉

東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン2』（講談社現代新書、二〇〇七年）

東浩紀『セカイからもっと近くに 現実から切り離された文学の諸問題』（東京創元社、二〇一三年）

稲田豊史『映画を早送りで観る人たち ファスト映画・ネタバレ——コンテンツ消費の現在形』（光文社新書、二〇二二年）

宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（ハヤカワ文庫、二〇一一年）

王琮海「不可能性としてのセカイ系——杉井光の忘却の否定神学について」、北出菜責任編集『tete』(同人誌、二〇二二年)

北出菜「光文社新書『映画を早送りで観る人たち』における「セカイ系」用法への違和感と考察」、note、二〇二二年四月二十四日

北出菜「夢を叶えた年——2024年私的振り返り」、note、二〇二四年二月三十一日

氷川竜介『日本アニメの革新 歴史の転換点となった変化の構造分析』（角川新書、二〇二三年）

前島賢『セカイ系とは何か』（星海社文庫、二〇一四年）

山内志朗「天使とアニメ1——セカイ系を生きる聖霊たち」、『未来哲学』第七号（未来哲学研究所、二〇二四年）

目次

はじめに——「セカイ系」を／で辿り直す 3

第一部 セカイ系の歴史

第一章 「セカイ系」とは何か——セカイ系概念の再分類 31

1 セカイ系論の前提を振り返る——定義と成り立ち 32

第二章

セカイ系とは何だったのか——ゼロ年代のセカイ系ブームを振り返る 65

- 1 文芸運動としての初期セカイ系ブーム——戦時下の「文学」 66
- 2 セカイ系をめぐる論争——『ゼロ年代の想像力』のセカイ系批判 83
- 3 セカイ系ブームの終息——オタク文化の世代交代 93

第三章

セカイ系の新展開——二〇一〇年代以降のセカイ系ルネサンス 103

- 1 ゼロ年代セカイ系ブームの総括——『社会は存在しない』と『セカイ系とは何か』 104
- 2 ポスト「3・11」と（しての）セカイ系——『君の名は。』というセカンドインパクト 111
- 3 社会化と音楽化——令和のセカイ系を象徴するキーワード 132

第二部

セカイ系の拡張と展開

第四章

セカイ系の日本文学史——透谷から大江まで 151

1 セカイ系とゼロ年代の文学——純愛小説からボーカロイドまで 152

2 日本近代文学の成立とセカイ系——「風景の発見」から小林秀雄の「私」まで 162

3 戦後文学とセカイ系——主体をめぐる戦後的時空 175

第五章

セカイ系の現代日本映画史——風景映画の系譜 195

1 セカイ系と現代日本映画——岩井俊二作品のリメイクをめぐる 196

2 風景の系譜——風景論争を超えて 213

第六章

「崇高」の喪失と「推し」——二〇一〇年代以降のセカイ系的想像力 237

1 内在化するセカイ系——「崇高」概念の変質から考える 238

2 「推し」と（しての）ポスト・セカイ系——「推し活」的な崇高へ 251

あとがき 268

セカイ系関連年表 276

第一部

セ
カ
イ
系
の
歴
史

第一章

「セカイ系」とは何か

——セカイ系概念の再分類

1 セカイ系論の前提を振り返る——定義と成り立ち

「セカイ系」の定義

では、そもそも「セカイ系」とはどういう言葉なのでしょうか。

まずこの章では、セカイ系をめぐる基本的な情報をあらためて整理した上で、現在、セカイ系に関する定義や歴史を知る上での基礎文献となっている前島賢さんの『セカイ系とは何か』を参照しながら、セカイ系の定義や概念を厳密に定義し直してみたいと思います。

まえじまさとし

現在、ごく一般的に流通しているセカイ系の定義について確認しておきましょう。たとえば、前島さんであれば、『セカイ系とは何か』のなかで、二〇〇四年刊行の東浩紀責任編集『波状言論臨時増刊号 美少女ゲームの臨界点』(同人誌)、『Yahoo! 辞書』(二〇一九年にサー

あずまひろき

ビス終了、提供は Japan Knowledge) の「セカイ系」の項目、そして二〇〇九年刊行の限界小説研究会編『社会は存在しない セカイ系文化論』(南雲堂) の三つの記述を列挙して紹介しています。このなかで、『美少女ゲームの臨界点』と『社会は存在しない』の定義は、二〇〇〇年代から今日にいたるまで、セカイ系に関する文献では、私が調べた限りでも、もっとも

多く引用されてきており、セカイ系の定義の記述としては代表的なものになっていると言っているのです。この三つとも文章の執筆者は記載されていませんが、「はじめに」でも打ち明けたように、『社会は存在しない』の文章を執筆したのは私です。一五年以上も昔の自分の文章を持ち出すのも面映おもはゆいですが、参考までに、ここでもあらためて示しておきます。

二〇〇〇年代（ゼロ年代）の前半に、コミックやアニメ、ライトノベル、美少女ゲームといったいわゆるオタク系文化の中の一群の作品に表れた独特の物語構造や主題系を示す用語としてネット上で使われ始めた言葉である。「∴」「物語の主人公（ぼく）と、彼が思いを寄せるヒロイン（きみ）の二者関係を中心とした小さな日常性（きみとぼく）の問題と、『世界の危機』『この世の終わり』といった抽象的かつ非日常的な大問題とが、一切の具体的（社会的）な文脈（中間項）を挟むことなく素朴に直結している作品群」を意味している。

（序文——「セカイ状」化する世界に向けて、『社会は存在しない』）

本書ではこれに加えて、現在、ウェブで検索すると読める「セカイ系」の定義の文章の

一部を三つ紹介してみます。

日本のマンガ、アニメ、ライトノベルなどの物語構造における特定の傾向を指す言葉。具体的には、若い男女の恋愛関係を典型とする狭小な人間関係が世界の危機や終末を左右するといった極端なファンタジーに基づく物語構造のこと。

(artscape、執筆者は星野太さん^{はしのふとし})

1990年代後半から2000年代に日本で制作・発表された作品の一群を、包括的に形容する概念。用語としては2000年代前半にネット上で登場、流行した。主人公の少年と恋愛相手の小さく日常的な二者関係(「ぼく」と「きみ」)が、社会関係や国家関係のような中間領域を媒介することなく、「世界の危機」「世界の破滅」といった存在論的な大問題と直結するような物語構造を持つ。

(美術手帖ARTWINK、執筆者は勝俣涼さん^{かつまたりょう})

マンガやゲーム、娯楽小説ジャンルの一つであるライトノベルなどで見ることができ

る物語の類型の総称。明確な定義はないが、インターネットを通じて2002年頃から広まった言葉で、後に、活字でも広がった。少年と少女の至極一般的な日常生活を、主人公の精神面や心情ばかりをクローズアップして描いているが、その恋愛や生活は世界の危機と直面している。しかし、世界の危機という大規模な問題がなぜ起こったのか、今世の中はどうなっているのかといった、社会や主人公周辺の具体的な描写は欠落している。このような共通点を持つ物語を「セカイ系」と呼ぶ場合が多い。

（コトバンク、提供は『知恵蔵』、執筆者は横田一輝さん）

三つとも『セカイ系とは何か』刊行後（つまり二〇一〇年代）に執筆された定義ですが、基本的には、『社会は存在しない』の私の記述と比較してもほぼ変化はないと言っているのです。また、『セカイ系とは何か』で前島さんがセカイ系の一般的な定義の共通要素として抽出した、「少女と少年の恋愛が世界の運命に直結する」「少女のみが戦い、少年は戦場から疎外されている」「社会の描写が排除されている」にも——二つ目の要素には触れられていませんが——ほぼ当てはまります。

定義に加えて、この言葉についての基本的な前提についても確認しておきます。これも

『セカイ系とは何か』を含む各種の解説で触れられていますが、この言葉の出自は、二〇〇二年一〇月三十一日、「ぶるにえブックマーク」というウェブサイトの管理人だった「ぶるにえ」という人物（現在はジュブナイルポルノ作家の「とかたきくちる」として知られます）の執筆した「セカイ系って結局なんなのよ」という掲示板のスレッドに遡ると言われます【図1-1】。『セカイ系とは何か』でも触れられていますが、ぶるにえさんのもととの「セカイ系」の説明を示しておきましょう。

● 「セカイ系」のまとめ

- ・ぶるにえが一人で勝手に使っている言葉で、大した意味はない
- ・エヴァっぽい（＝一人語りの激しい）作品に対して、わずかな揶揄を込めつつ用いる
- ・これらの作品は特徴として、たかだか語り手自身の了見を「世界」という誇大な言葉で表したがる傾向があり、そこから「セカイ系」という名称になった

その後、この「セカイ系」という言葉が、徐々に冒頭に掲げた意味に変化していきながら、人口に膾炙^{かいしや}していきます。そして、そのセカイ系の代表作として、高橋しん^{たかはし}

11月1日

● 「セカイ系」のまとめ

- ・ぶるにえが一人で勝手に使っている言葉で、大した意味はない。
- ・エヴァっぽい（＝一人語りの激しい）作品に対して、わずかな揶揄を込めつつ用いる
- ・これらの作品は特徴として、たかだか語り手自身の了見を「世界」という誇大な言葉で表したがる傾向があり、そこから「セカイ系」という名称になった

● サワセへの影響でSuperLine1500シリーズのスパイダーマンを購入。1500円なら悪くない出来。吹替がいかした出来で、とりわけ女性キャラが全部在久間レイなのが素晴らしい。つば、おねてい13話に足りなかったのはさん分を補給できます。

図1-1 ぶるにえブックマークの「セカイ系」の最初の定義

この『ほしのこえ』の物語が、セカイ系の類型をほぼ正確になぞっていることは明らかです。一方にミカコとノボルのきわめて小さな「きみとぼく」の位相があり、他方で、タルシアンが人類を全滅させようとするきわめて巨大な「セカイ」Ⅱ「世界の終わり」の位相があり、この極小と極大の世界が中間項を挟まずに直結しています。中間項とはこの場合、作品世界の背景的な説明や歴史性を意味します。たとえば、タルシアンがなぜ人類を襲うのか、あるいはミカコがなぜリシテア艦隊に選ばれ、タルシアンと戦わなければならないのか、『ほしのこえ』は作中でいっさい説明することがありません。たとえば富野由悠季が「機動戦士ガンダム」シリーズで構築した「宇宙世紀」の設定のような物語の背後を支える「大きな物語」が、『ほしのこえ』では雲散霧消うんさんむしょうしているのです。これが、『ほしのこえ』のセカイ系作品たるゆえんだとされるわけです。

そして、「はじめに」でも書いた通り、この言葉がその後二〇〇〇年代半ばから後半にかけて、オタク文化の枠わくを超えて、現代文化や現代社会を考えるためのキーワードとして広く注目を集めたのでした。

前島賢によるセカイ系史の整理——「ポスト・エヴァ」という文脈

さて、このセカイ系について、現在までもっともまとまった整理と検討を加えた本が、ここまでも繰り返し参照している『セカイ系とは何か』です。同書は、宇野常寛^{のつねひろ}さんの『ゼロ年代の想像力』などと並び、二〇〇〇年代のサブカルチャーやオタク文化の状況と変遷^{せん}を知るための、いまなおもっとも優れた文献のひとつでもあります。本書に先行するこの『セカイ系とは何か』の内容をまとめる形で、セカイ系をめぐる論点を整理することにしましょう。

繰り返すように、著者の前島さんはこの本で、宇野さんによる『ゼロ年代の想像力』でのセカイ系批判を含め、オタクや批評家の間でのセカイ系ブームやセカイ系論争がひと通り終息した二〇一〇年の時点で、主にオタク文化論の視点からセカイ系について総括しました。

前島さんのセカイ系(史)論^{ろん}の論旨^{ろんし}は、ひとことでは言えませんが、当初(二〇一〇年刊行)のソフトバンク新書版にあった「ポスト・エヴァのオタク史」というサブタイトルに集約されています(その後、二〇一四年の星海社文庫からの再刊版では削除されています)。

前島さんはまず、セカイ系をめぐる二つの難点に着目するところから話を始めます。ひ

とつ目は、少なくとも同書が執筆された二〇〇〇年代末の時点において、セカイ系という言葉が大きな盛り上がりを見せていながら、その言葉の意味する内容が曖昧で混乱を招いているという状況があること。二つ目は、右に挙げたセカイ系の一、般的な定義が、その代表作とみなされる個々の作品群の物語には必ずしも正確に当てはまらないということです。

前島さんは、そうしたセカイ系理解をめぐる混乱を整理するために、当初のセカイ系という言葉に込められていたひとつの歴史的文脈に注目します。それが最初にセカイ系という言葉が登場したスレッドで、発案者のふるにえさんが記していた、「たかだか語り手自身の見を「世界」という誇大な言葉で表したがる傾向がある」作品、つまり、「エヴァっぽい（＝一人語りの激しい）作品」という意味合いです。

この「エヴァ」とは、もちろん一九九〇年代のポップカルチャーを代表する大ヒット作である庵野秀明監督のテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（一九九五～九六年）を指しています。『エヴァ』が九〇年代後半に社会現象と呼べるほどの熱狂的なブームを巻き起こし、後続のさまざまなコンテンツに絶大な影響を及ぼしたアニメ史に残る傑作であることはよく知られているでしょう。そして、九〇年代のテレビアニメの『エヴァ』は、物語の終盤（後半）になるに従い、主人公・碇シンジら思春期の少年少女たちの内面、自意識の

悩みに過剰にフォーカスするようになっていきます。すなわち、前島さんの解説によれば、ここでぶるにえさんが記す「エヴァっばい（＝一人語りの激しい）」とは、そのテレビアニメの後半部分、あるいは九七年に公開された劇場版の『エヴァ』を指します。『エヴァ』終盤で描かれたのは、監督・庵野秀明の内面、自意識の悩みそのものだったように見える。言ってみれば『エヴァ』は、終盤及び劇場版で、唐突に「究極のオタク向けアニメ」から「オタクの文学」へと変化したのである。「…」／観客へのサービス精神を放棄し、自分の内面に目を向けたことで、かえって幅広い共感を呼び、外に開かれてしまうという皮肉な事態は、内省の時代、自分探しの時代だった90年代を象徴する出来事と言えるだろう」。

このようにして、前島さんは、実証的な事実確認を丁寧に積み重ねていき、セカイ系的な想像力を「ポスト・エヴァ」という文脈のなかに置いて捉え直すことを強調します。

さて、ここまでの説明で、ぶるにえがセカイ系という語で名指そうとした「エヴァっばい（＝一人語りの激しい）」の正体も大まかにつかめたのではないだろうか。

その言葉が示すのは、とりわけ後半の『エヴァ』であり、「オタクの文学」としての『エヴァ』である。「世界の中心」＝自分の見の及ぶ範囲の中心、つまり自分の座る

体育館のパイプ椅子で、「アイを叫んだ」Ⅱ激しく一人語りした『エヴァ』である。そこに現れた自意識というテーマである。

そして、『エヴァ』後半の表現やテーマを受け継いだ作品こそが、ゼロ年代に入るとエヴァっぽいⅡセカイ系として名指されることになったと言える。

「∴」セカイ系が激しい議論に晒されているのは、それが『エヴァ』論争の形を変えた再現であるからに他ならないと言える。作品のみならず、作品をめぐる状況までも含め、セカイ系とはポスト・エヴァの問題系なのである。

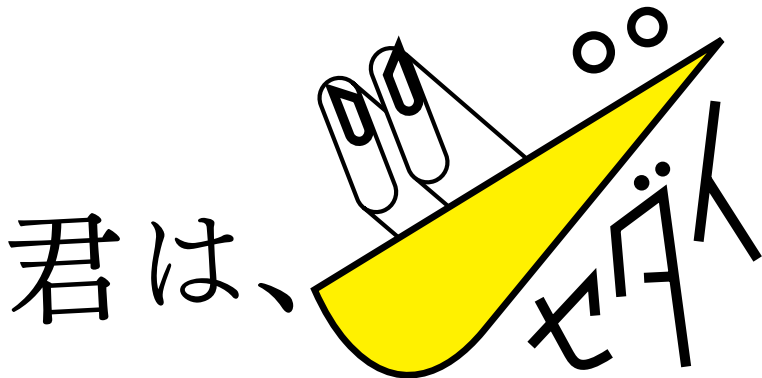
（『セカイ系とは何か』）

ともあれ、前島さんは、『セカイ系とは何か』において、「その最初期においては、セカイ系という語は、「きみとぼくと世界の直結」といった物語の構造ではなく、ポスト・エヴァという文脈のなかで、同作と類似した作品を指すために使われていた」という経緯を繰り返して強調します。そして、「セカイ系とは、90年代後半に大ヒットしたアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』と、その影響とは何だったのか、というオタクたちの問いかけから生まれたものと言える」と結論づけています。その上で、彼は同書のなかでセカイ系の定義を

以下のように更新——前島さん自身の企図としては「是正」という方が正しいでしょう——
することを提案しています。

『新世紀エヴァンゲリオン』の影響を受け、90年代後半からゼロ年代に作られた、巨大ロボットや戦闘美少女、探偵など、オタク文化と親和性の高い要素やジャンルコードを作中に導入したうえで、若者（特に男性）の自意識を描写する作品群。その特徴のひとつとして作中登場人物の独白に「世界」という単語が頻出することから、このように命名された。

そして、この前島さんなりの定義から導かれた「ポスト・エヴァ」のオタク文化の大きなパラダイムシフトである「萌え」と「セカイ系」を統合し、「一人語りが激しい」「きみとぼくと世界の運命の直結」といったセカイ系の定義に完璧に一致する小説」として、谷川流さんの人気ライトノベル『涼宮ハルヒの憂鬱』（二〇〇三年）を挙げ、「ゼロ年代前半のオタク文化を象徴する作品、ポスト・エヴァの代表作」と高く評価するのです（ここで、彼が『ハルヒ』をセカイ系の「代表作」とは書いていないことにも注意してください）。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!